

農業を生かした街づくり

土いじりから本格的な農業体験まで！街に広がる「農ある生活」



安全で新鮮な野菜を食べたい、緑に囲まれて癒しを得たい、子どもに土いじりの機会を与えたい。昨今、生活に農業を取り入れた潤いあるライフスタイルが注目されています。柏の葉周辺地域では、マンションや商業施設などの都市開発と同時に、豊かな田園風景を大切に農業と共生する街づくりが進行中。様々な農業体験のプログラムが展開し、都市の中で「農ある生活」が広がっています。

気軽に農体験

街の中で、気軽に農業を体験したいー「まちのクラブ活動“KFVはじめての、土いじり”」は、そんな住民が集まるサークル活動です。柏の葉キャンパス駅から徒歩5分「まちのクラブハウス」に併設された小さな畑を共有して、野菜作りを体験します。

活動は隔週で、1回1～2時間程。現在10名が参加しています。柏の葉キャンパス駅前のマンションに住む主婦の田淵香奈美さんは、友人からの誘いで参加。「野菜が嫌いだった子どもが、ここで採れたものはおいしそうに食べる。『また採ってきてね』と言われるので、やりがいがある」と、お手製野菜の効果に驚いています。

土いじりクラブで野菜作りの指導にあたるのは、農作業支援を行うNPO野良坊の平川善仁さん。年間の野菜作り計画を立て、毎回の作業をサポート。作業後は、採れたて野菜でランチをしながら、参加者からの園芸や料理法に関する質問に応じます。

新たな農業ビジネス

そんな平川さんが、「もう少し本格的に農業に挑戦したい人にお勧め」と言うのが、「農業体験農園」です。自身も、2006年から柏市花野井に開園した体験農園「野菜畑」で指導を行っています。

農業体験農園では、単に土地だけを貸し出す「市民農園」とは異なり、農家が参加者の作業を全面サポート。種・苗・農具・肥料など必要な道具の準備から、野菜作りの指導まで行うので、参加者は作付から収穫まで一連の農作業を体験することができます。入園料は年間3～4万円程度で、一人当たりおよそ30平米の区画が割り当てられ、夏作・秋作を通じて1年で20～30種の野菜を栽培します。もちろん、収穫した野菜はすべて持ち帰ることができます。

体験農園は、耕作放棄地の対策や農家の収入確保につながる、新たな都市型農業のあり方としても注目されています。現在、多くの農家は収入不足や高齢化、後継者不足など様々な問題に直面し、農業の継続が難しくなっています。

しかし、農業体験農園であれば、所有する土地とこれまで培った野菜作りのノウハウを生かして、安定した所得の得られるビジネスが可能。運営主体は農家なので、土地は税優遇のある農地として認められます。さらに、作業は参加者である一般市民が担うので、農家の負担軽減にもつながります。



土いじりクラブ、この日の作業はナスの誘引（茎や枝を支柱にひもで結び付け、目的の位置まで導くこと）と芽かき（不要な芽を取り除くこと）。どれが不要な芽なのか、平川さんの指導に聞き入ります。



採れたて野菜を使った料理ワークショップも随時開催。写真は夕顔を使ったかんぴょう作りにチャレンジ。

農業を生かした街づくり

農園で生まれる交流

そんな農業体験農園が、2010年3月から柏たなか駅近くの農園でも始まりました。そのひとつ「ジョイファーム岡田」では、現在19の区画で約40人が参加しています。各人が都合のよい時に農作業をするほか、月2回は園主の岡田長一さんが直接指導。

夫婦で参加している益田さんは共に農業初体験。「丁寧に教えてもらえるので安心して取り組める」と順調な出だしに満足そう。「作る楽しさとともに、重労働な農業の大変さも痛感した。“無農薬野菜を安く買いたい”という消費者の一方的な視点も変わった」と、生活意識の変化も生まれているようです。

それぞれが自分の区画で野菜を育てながらも、作業中は参加者同士の会話が盛んに。農業経験者が初心者にアドバイスをしたり、道具の貸し借りをしたりと助け合いながら作業は進みます。参加者の栗田裕子さんは、コミュニケーションを活発にしたいとの想いから、農園のお知らせやイベント情報をまとめた情報紙「岡田通信」を自発的に発行。料理教室や親睦会も行われ、農家と住民が一緒になったコミュニティが形成されています。



柏たなか駅高架下には、農ある街づくりを進めるための活動拠点「環境コンビニステーション」がオープン。写真手前は見本農園、奥の施設には体験農園の参加者が使えるロッカーや更衣室、手足の泥汚れを落とす洗い場、キッチン付きスタジオなどを備える。



土の学校では、現在ナスやキュウリ、トマト、ジャガイモ、キャベツを栽培中。あっという間に成長する作物の生育スピードに、参加者は「ご近所におすす分けしても食べきれないくらい」と嬉しい悲鳴。

市民が創る農ある生活

市民の手で作り上げた体験農園「柏たなか農園 土の学校」も、今年からスタートしました。農家との共同出資で農業会社を設立した松本庸史さんが、耕作放棄地を地元地権者から借り受け、荒廃した土地を耕すところから始めた手作りの農園です。松本さん自身も参加した千葉大学の市民講座「柏の葉カレッジリンク・プログラム」の受講生仲間と一緒に、2009年から約1年間、試験的に野菜作りを実践し病害や害虫など土地の特徴を把握。今年3月から一般参加者を募り、20区画で開園しました。

松本さんは、元新聞記者。取材経験を通じて、食料自給率の低下や厳しい農業の現状を知り、解決には一般の人が農業と接する機会を増やすことが重要だと考えました。「農家の後継ぎは必ずしも

長男である必要はない。一般市民が後継者となってもいいのでは」と、土の学校から農業従事者を輩出することを目指しています。

柏の葉周辺地域では、農業体験農園が今後さらに開園する計画。また、今回紹介した各プログラムでは、来期以降の参加者募集はもちろん、誰でも参加できる一日限定イベントも随時実施予定です。

各プログラムの問い合わせ先。
KFVはじめての、土いじり
[TEL] 04-7137-2221
(まちのクラブ活動事務局)
農業体験農園 「野菜畑」
[TEL] 070-6643-7046(平川さん)
「農あるまちづくり」農業体験農園
[TEL] 04-7157-2861
(環境コンビニステーション)
柏たなか農園 土の学校
[TEL] 080-5656-3704(松本さん)



平川 善仁 氏
NPO 野良坊 理事長
2006年より柏市花野井の農業体験農園「野菜畑」を支援。

キーパーソン・トーク

つくばエクスプレス沿線開発に関わった際に農家の現状を知り、打開するためには農業体験農園が重要だと感じていました。農家は、農地と野菜作りの技術を持つプロフェッショナルです。そして、都会には「土いじり」をしたい多くの人がいます。つくばエクスプレスはまさに、これらの人々の想いがつながる路線。そこでは需要と共有が成り立つはずなので、大きなチャンスだと思うのです。

農業体験農園は、「野菜作り教室」ではないところがポイント。単なる野菜作りではなくて、「農業」

を体験する場所です。農業とは、園芸技術はもちろん、食文化や経済活動、また作業中の人々の助け合いなどすべてを含む概念です。新鮮な野菜が食べられる、緑に触れて癒しが得られる、農業理解が深まる、食育につながる、地域交流が広がる、ご近所での互助関係が生まれるなど、参加メリットはひとつではありません。

農業を生活に取り入れることは素晴らしいことですが、人それぞれ興味の度合いや時間の制約は異なります。土いじりクラブのような気軽なものから、農業体験農園のような本格的なものまで、農業と触れ合うきっかけが今後も増えることを期待しています。

□編集後記□

取材中に受けた質問に回答。当レターのバックナンバーは、柏の葉アーバンデザインセンターのWEBサイトで公開しています。今月からは、最新号が環境コンビニステーションでも布置されるようになります。(蛭川)

●このニュースレターに関するお問い合わせ先

柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) 広報担当 小林、蛭川
〒277-8518 千葉県柏市若柴字元堂178-3 柏の葉キャンパス駅前148街区3画地
TEL 04-7140-9686 FAX 04-7140-9688
E-MAIL ma-kobayashi@udck.jp WEB http://www.udck.jp

柏の葉
アーバン
デザイン
センター

UDCK